

まちの史跡めぐり

180

町文化財専門委員 石龍 豊美夫

新原海軍炭鉱の雑誌『新原』(4)



前号までの3回にかけて紹介したとおり、謄写版二色刷の月刊『新原』は大正13年(1924年)1月、第1巻第1号が発行され、大正14年(1925年)2月の第2巻第2号まで、14号分の発行が確認できました。

今年5月の連載177回では「大正14年(1925年)3月以降が発行されているかどうかはわかりません。」と書きました。しかし、雑誌の体裁が変わり、活版刷りで刊行が継続されていたことが、従来から知られていた雑誌『新原』によって確かめられました。今回は、このことについて

ふれてみたいと思います。

活版刷り『新原』は毎月5日、海軍燃料廠採炭部(つまり新原海軍炭鉱です)の発行で非売品。発行兼編輯人 尾崎強、印刷人 木村亀太郎(福岡市)。私が持っているのはおよそ40年前に複写したもので、現物は所在不明となっています。

複写で残っているものは、いずれも昭和4年(1929年)の11冊で第6巻。大正13年(1924年)創刊の『新原』から5年後(6年目)で、巻数は合います。それで体裁が違っていますが、同じ『新原』という雑誌だと

確認できるわけです。昭和4年(1929年)1月号には号数の記載がなく、2月号は第6巻第2号と表紙に記載されています(次頁参照)。このことから、大正13年(1924年)1月〜昭和3年(1928年)12月の5年間に60号分が刊行されていることになり、毎月1回も欠かさず刊行されていたことが明らかになりました。

表紙のデザインは3種類あり、1月号〜4月号が同じ、5月号〜7月号および9月号〜11月号が同じ、8月号だけが異

なっています。頁数は1月号が32頁、2月号および3月号が24頁、4月号〜10月号が20頁、11月号が72頁です。11月号は「創業四十年記念」で増頁となりました。表紙のグラフは明治24年(1891年)〜昭和3年(1928年)の石炭産出の推移を描いた、38年間の「生産年度次表」です。またこの号では発行兼編輯人が吉田儀市、印刷人が松富文策(福岡市)へと変わっています。

記事は細かくなり、いろいろなのがわかりますが、2月号(62号)掲載の、雑誌『若杉』が発

行されたという記事を紹介しておきましょう(次頁上部参照)。現物は未確認です。

これによると、昭和3年(1928年)の昭和天皇の即位(御大典)を記念して雑誌『新原』の姉妹誌として小中学生向けの雑誌『若杉』が誕生したとされています。猪俣老は猪俣昇で当時はロンドンに滞在中でした(次回でふれます)。

希望に燃ゆる雑誌『若杉』生る

曠古の御大典を記念として、

当部より通学する中等学校生徒及小学児童を以て組織する雑誌『若杉』所謂『小新原』が当部林崎官舎に産ぶの声を揚げた。

天真爛漫たる内容、可愛らしい小学児童の偽らざる告白、編者の手際の冴え、聴て龍飛せんとする児童の最もよきお友達である。

会費僅かに月に金十銭、可愛い児童をお育てになつて居る親達方、頑是なき尊い児童の為に御入会あらんことを!!

会長 猪俣 老
幹事 平井康城

けん坊

長田寅彦

益田正雄

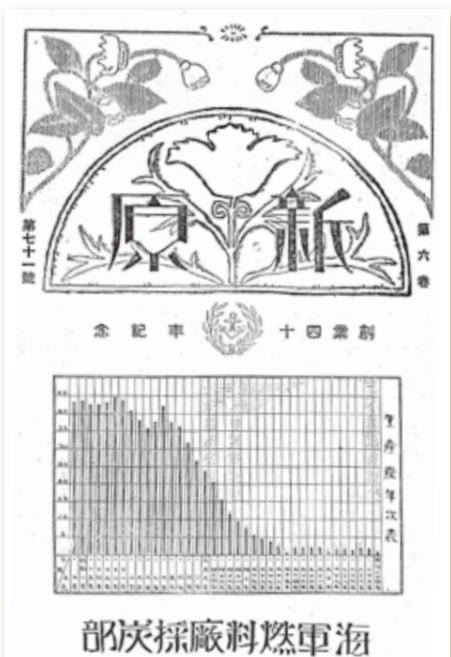
入会希望の方は、幹事なり会員の方へ御申出ありし。(略)



新原 6巻5号(65号)



新原 6巻2号(62号)



新原 6巻11号(71号)



新原 6巻8号(68号)